



## 怪僧ラスプーチンへのオマージュ

藤枝滂子

私の、ジャテックとの関係がいつごろ、どのようなし  
て始まったのかは、全く記憶がない。とにかく、かすか  
に思い出すのは、いつの間にか栗原ナニガシというオジ  
さんのお手伝いをしていたようだ、ということである。  
お手伝いとは、米国軍隊から逃げ出してきた兵士たちの  
インタヴュー役の意味である。そして、私は、この栗原  
オジサンがどういう人なのか、当時は算聞にして知らな  
かったのではないかと思う。陽気でいつもニコニコして

いた人という印象が残っている。「イントレピッドの四  
人」の後、誰かがジャテックを手伝えとって、私を栗  
原さんに引き合わせたのだろう。それが故鶴見良行さん  
だったのか、誰だったのかは覚えていない。

ジャテックへのリクルートの日付ははっきりしないが、  
ベ平連にリクルートされたのがいつかは、はっきりして  
いる。一九六五年の半ばごろのことだったように思う。  
吉川勇一さんが、私の勤務先の出版社まで訪ねてこられ  
て、「ベ平連という新しい市民運動を始める（始めた？）  
ので、ぜひ手伝ってほしい」といわれたのである。なぜ  
こういうことになったのかは、実は私にとって長い間謎  
だったのだが、その謎は最近になってやっと解けること  
になった。鶴見俊輔さんが、「ベ平連には英語のできる  
人が絶対必要になるということを考えていて、それで一  
本釣りに行ったということなんだ、ワッハッハ」と何々  
大笑されたのである。なんだ、そういうことだったのか  
と、はじめて腑に落ちたのだった。

当時、私は三五歳、ベ平連との出会いを通じて、幸い  
たくさんのものを得ることができ、おかげで私の人生は  
ほんとうに豊かなものになった。

もちろん、楽しいことづくめだったという意味ではない。でもそれは、ほんとうに多彩、多才な人びとの集合体で、人生の一時期をこういうエキサイティングでドラマチックな集団（集団といっても、それは組織的なものではなく、不定型であることを特徴としていたが）とすごせたことをありがたく思っている。

ベ平連の別動隊であるジャテック（さらにその別動隊である句会）も親集団に負けず劣らずの、エキサイティングでドラマチックな集まりだった。しかし、その運動の性格からして、両者には決定的な違いがあった。ベ平連は、外にむかって働きかけ行動するオープンな活動形態をとるのたいして、ジャテック（これを私たちは「ジャの字」とか「蛇の字」と呼んでいた）のほうは、米軍からの脱走兵を匿うことを本務とする、いわば「隠密部隊」である（とりわけ句会はそうだった）。隠密だから、当然、自分の守備範囲以外のことは知らないですませ、手も口も出さないことが暗黙の了解になっていた。メモもできるだけとらなかつたし、私の場合は必要上とつたメモもほとんどん廃棄していた。友人、知人にカンパを依頼したり、支援を求めたりする場合にも、私自身が「ジャの

字」で何をしているのかについては決して語らなかつた。もっとも、こんなふうに徹底して「隠密化」したのは、米軍スパイ潜入、メイヤーズ逮捕によって、脱走兵士の北方脱出ルートが閉ざされて、いうところの「ジャの字」二期の「句会」になってからのことではなかつたかと思う。栗原幸夫氏についての私の印象が、陽気で、ニコニコしたオジさんというものだったと書いたが、これは栗原氏が実際にニコニコしていたというよりも、地獄の様相を呈した二期とくらべると、一期が牧歌的であったことの象徴として、そのように感じているのかもしれない。

\*

今から思えば、ジャテック第一期に属することになるが、米国内のあちこちで、私たちは米軍からの脱走兵、つまりあなた方の息子たちを援助する地下活動をしている、少なくともそういう事実を知ってほしいし、各人ができる方法で援助してほしい、と訴えて歩いたことがあった。

六〇年代の後半、私は毎年のように勤務先から出張を

命じられて、一か月から三か月ほどの期間、米国を訪れていた。そこで、ベ平連やジャテックの誰から頼まれたわけではなかつたが、出張仕事の合間を縫って、西海岸や東海岸のいくつかの場所で、つてをたどっては、ミニ集会を開いてもらい、脱走兵援助活動への支援を訴えたのである。それはたいいてい白人中産階級に属する個人の家で、時には小さな教会の場合もあったような気がするが、とにかくベトナム戦争反対の活動をしたり、あるいはその問題意識をもつ人びとが、夕食後、三々五々集まってくる。コーヒーなどの飲み物、クッキーやポテトチップスが用意されていて……といったくろいだ雰囲気なかで、やおら私が話をする、といったことが多かった。いつの場合も、私が「脱走兵」という言葉を使つたとたんに、それまでの和やかな雰囲気は突然こわばり、緊張感が走るのである。これは多分一九六八年のことで、六八年といえば、黒人の公民権運動、それと連動する形で展開されたSDS（民主社会のための学生連合）を中心とし、大人の白人中産階級レイカルや一部リベラルまでもまきこんだベトナム反戦運動が西海岸や東海岸各地、それにシカゴなどで大きく盛りあがった年である。

当時の私たちの認識は、米軍から逃げてくる兵士すなわち脱走兵という単線的なもので、AWOL (Absence without Leave 無許可離隊) などというカテゴリーやシステムがあることなど、全く知らなかつた。軍隊からの脱走(デザイション)という言葉は、米国人にとって、旧日本軍でのそれが日本人一般にとってもっていた意味とあまり変わらないほどの否定的な意味あいをもっていたのだろう。だからこそ、プラグマチズムに立つ米国では、AWOLといった概念を導入し、理由、動機は何であれ、軍隊に嫌気がさして逃げだす兵士を合法的に救う道を開いたのだろう。

当時はそんな知識は皆無だったから、あちこちの集まりで、ベトナム戦争反対一般について語っているあいだはにこやかで暖かい人びとが「脱走兵」という言葉にみせる当惑や沈黙に戸惑ったものだった。

もしこれが一か所にとどまって、人びととつこんで話す機会をもっていたら、あるいは事情は違っていたかもしれない。しかし、前述したように、出張仕事の合間を縫ってのことだから、それ以上に私の認識は深まらずじまいだった。しかし、この時感じた「脱走兵」をめぐ

る認識のズレは、その後、私たちを大いに悩ますことになるのだった。

思い出したことをついでに書いておくと、六七年だったか、六八年のことだったか記憶はさだかではないが、MIT（マサチューセッツ工科大学）のノーム・チョムスキーのところにも話をしに行ったことがあった。この話しあいの結果、武藤一羊さんと連絡をとる必要が生じて、そのことをノームにいうと、彼は研究室の電話を使わせてくれた。当時は、一ドル三六〇円、日本国外へのドル持ち出し制限五〇〇ドルの時代だった（はず）だから、かかった電話代三〇ドルは、私の懐具合からするときびしいものだった。ノームは、これをベ平連とジャテックにたいするカンパだ、といって、お金を受けとってくれなかった。以来ずっと私の心には、三〇ドルの借金としてひっかかったままになっている。

\*

六九年になってからだと思うが、ある時、私は高橋武智さんから呼び出しを受けた。高橋さんは、米軍スパイ潜入とメイヤーズ逮捕という事態により、これまでジャ

ろう。

しかし、窮鳥として私たちの懐に逃げこんでくる兵士たちのなかには類い稀な勇氣と信念をもって、米軍という怪物に挑んだ若者もいたことは事実だが、大半は右のような期待される人物像とは程遠く、そして多種多様だった。六〇年代米国西海岸の若者文化やドラッグ・カルチュアの洗礼を受けた者もいれば、農村育ちで自国の全体像さえ結べない者もいるというぐあい。人種・民族的にも多様だったが、社会的出身階級もいろいろで、都市中産階級出身者よりも都市や農村のより貧しい階層出身の者のほうが多かったように思う。年齢ははたち前後。その年ごろのごく「フツー」の若者といっても、当時の日本の同年齢の若者像からは相当にかけ離れていた。

さて、脱出ルートがある間は、個人の信条とか資質とかにそれほど神経質にならなくてすむ。しかしルートが閉ざされてから以後は各若者の信条とか資質といったものにより厳しくならざるを得なかった。「スクリーニング」によってまずフィルターにかけなければならぬ。何時間もかけてインタヴューし、それが二回、三回と重なることも珍しくない。こうして、スクリーニングをパ

テックを動かしてきた栗原氏が手を引くことになり、その後をばくが引き受けることになりました。ついては、協力方よろしくお願ひします、といった趣旨のことをいわれた。大きな目玉をグリグリさせながら、彼のいつもの独特の口調だった。場所も日時も覚えていないが、その時の高橋さんの雰囲気は奇妙にはつきりと記憶に残っている。

その時は知る由もなかったが、私にとつての苦しみの第二期はこうして始まったのだった。

脱走兵を匿おうとする日本人の側がその兵士にたいしてもツイメージ——期待する脱走兵像といったものは、およそつぎのようなものではないかと思う。

——反戦、反軍の志を堅持し、

——自恃の念が強く、

——自分をとりまく状況の分析、自分の信念、自分の気もちなどをきちんと言語化でき、

——どんな困難な状況にも耐えうる強靱な精神の持ち主……

無論、このすべてを兼備していることはむずかしいにしても、ある種、ある程度の期待があることはたしかだ

スして受け入れがきまると、彼はとたんにジャテックの「管理」下におかれることになる。管理されることをもつとも嫌悪するはずのジャテック、この場合は句会のメンバーが、管理する側にまわるといふ、これはなんとという矛盾、なんとというアイロニーだったことか。

預つてくださった家庭でなんらかの悶着が起これば、その家庭にたいしては平身低頭して謝り、若者にたいしては道徳的な説教をしたり、小言を重ねるといふ関係になつてしまふ。もつと金を計画的に使え、自らをもつと律せよ等々……。一方、若者のほうはいええ、時には不貞腐れ、ふてぶてしい態度をとるかと思えば、表面は恭順の態度をとりながら目には狡猾な表情を浮かべている……。管理する者と管理される者。管理する側はもろもろの大義名分を背負つた強者、管理される側はそれに従うしかない弱者——こういった歴然たる力関係が両者の間に成立してしまふ。こういう関係のなかでは、匿われる者の精神が荒廃するだけでなく、匿う側もスポイルされるし、またそのことに気付いている分、筆舌に尽くしたい疲労感、徒労感にさいなまれることにもなる。両者は決して対等な関係には立ち得ない。それは、ほん

とうにつらく苦しい体験だった。

句会では重苦しい議論が重ねられるようになった。時には相手の胸ぐらにつかみかからんばかりの激しい言葉の応酬になったこともあった。過ぎ去ってしまえば、それはせいぜい長くて数か月のことだったが、心理的には何年もつづいたように感じられる時間だった。

私を感じていたもうひとつのフラストレーションに、私の英語の問題があった。私の英語は、いかにも中産階級のな、教科書英語で、まことにお行儀がいい。これがよろしくないのである。兵士たちの使う言葉は、各地の方言あり、さらにスラング、それも多様な背景をもったスラングなのだ。匿う側と置かれる側の不均衡な力関係のなかで、私の英語は、高みから一方的にものをいう関係をいっそう増幅することになったという側面は否定しがたくあったのではないか。同一言語による日常のなかでもこうした心理的關係は存在するが、極限に近い状態での異言語コミュニケーションは、事をいっそう複雑にするのである。

\*

この小稿は、そうした彼へのオマージュとしたが、しかし、考えてみれば、彼を日本へ派遣するほどの力をつけていた米国のベトナム反戦運動全体への、これはオマージュでなければならぬ。だが、それをいうなら、ベ平連、ジャテック、句会、それらの活動を支えた無数の人びと（そして、その無数の人びとのなかに、苦しみつつも微力を尽くした私自身も含めることを許していただきたいと思うのだが）にもオマージュは捧げられなければならない。そこで、シッド・ピーターマンまたの名、怪僧ラスプーチンに、あらためてこの時代のすべてを代表してもらおうことにしよう。

だから、シッド・ピーターマンがきてくれたとき、暗闇に太い光明が射した思いだった。小踊りしたいほど嬉しかった。水面下であわや窒息寸前の状態から、水面上に顔が出てやつと息がつけるようになった、とでもいえばいいだろうか。シッド・ピーターマンとは、米国西海岸のPCS（パシフィック・カウンセリング・サービス）から米兵の救援活動のためにきてくれた人である。地獄に仏とは、まさに彼のことだった。もつとも彼は「仏」ではなく、キリスト教の神の使者としての黒の僧服をまとっていたのだが。

兵士たちが合法的な権利を主張して除隊を申請する、あるいは軍隊内で行なう合法的な抵抗活動をサポートするべく、彼は兵士たちへのカウンセリング活動を精力的に展開していった。

怪僧ラスプーチンのあだ名をたてまつられた彼の活動、そしてジャテックの「方針転換」によって、私の苦しみには終止符が打たれることになった。禿げ頭にピンク色の顔、恰幅のよい長身をくるぶしまで届く黒い僧服に包み、裾をひるがえして闊歩していた、ゲイでもあった彼の姿は、今も私の脳裡に焼きついている。